



山田

山田は元、小山田と言った。勢陽五鈴遺響によると**小山の原に民居して田を開く**とあり、また加富神社記によれば、**上を小山、下を山田**といったと伝えている。

小山田村の往古は、

平安時代

- ・弘仁（西暦 810～823）・・・坂上田村麻呂が伊勢の国司となり、当村も所領の内になる。
- ・保元（1156～1158）・・・伊藤影綱の所領となる。
- ・文治（1185～1190）・・・因幡国前司廣元の所領となる。

鎌倉時代

- ・嘉暦（1326～1329）は萩山城主後藤助光の所領であったが、元徳二年亡んだ。

室町時代（含む：南北朝、戦国）

- ・延元元年（1336）北畠親房が伊勢に京より下り、其の子、**北畠顕能**が延元二年に伊勢の国司となり、**当村**も所領となる。
- ・永禄八年（1565）足利義輝の家臣 **矢田監物**なる者、**当村**に来て押領司となり築城した。しかるに、天正五年（1577）織田信長の家臣 瀧川一益に攻められ当村を去った。（古文書によっては、異なるものがある。）
その後、伊勢神戸城主 織田信孝の所領となり、その臣 **田中兵部**が当村を支配。その後、**葉木藤左右衛門**が引き継いだ。
- ・天正十一年（1583）信孝の弟 信雄が跡を継ぎ、**天野周防守**に治めさせた。
- ・天正十二年（1583）羽柴秀吉に織田信雄が滅ぼされ、秀吉の所領となり、天正十五年（1591）**桑名城主 氏家内膳**の領地となった。



江戸時代

- ・慶長五年（1600）関東 徳川家康の領地となり、水谷九郎左右衛門に支配される。
- ・慶長六年土方雄久が領主となり、其の子 土方雄が菰野城主に赴任し、小山田、水澤、等の諸藩を治める。
- ・以降 江戸時代に至り明治元年まで小山田は菰野藩となり土方一族が領主を務めた。
- ・土方雄氏の代（慶長年代）より山田には二人の庄屋を置き、村政を司った。
- ・慶長十年 犬山藩より菰野藩の家老となった長田清左衛門の子 長田惣左衛門重直が山田の代官を務め、明治初年まで一族が引き継いだ。

明治以降

- ・明治二年（1869）七月十六日 土方雄永 版籍奉還。
- ・明治四年七月十八日に菰野県山田村となり、さらに明治四年十一月二二日安濃津県三重郡山田村、小山村、六名村、堂ヶ山村となる。
- ・明治二二年四月一日 町村制施行により、4ヶ村を合併し、三重県三重郡小山田村大字山田となり、4ヶ村には大字を付けた。また、西山、内山は、大字山田平野新田と言うように小字で呼ばれた。
- ・昭和二九年三月三十一日に四日市市に合併。この時、西山町、内山町、美里町が山田町とともに誕生した。
- ・その後、鈴鹿郡久間田村から別れた鹿間、和無田が四日市市と合併。小山田地区に入った。





鹿間

久間田村・・・昔の久間田村は、下大久保、鹿間、南小松、岸田、和無田の五カ村に分かれていました。

明治二二年町制実施と共に、下大久保の「久」鹿間の「間」和無田と岸田の「田」をとって「久間田村」と改め、昭和三一年九月三十日樺村と合併して三鈴村が発足するまで続けました。

集落は、内部川の南岸の低地にありました。江戸時代を通じて亀山藩領でした。

今からちょうど百年前、鹿間町（当時・鈴鹿群久間田村大字鹿間）は、内部川堤防の決壊で多くの民家が流され、集落四十戸のうち二十一戸を押し流す大惨事となりました。

その後、民家が一部を残し、内部川を境に左方の北山、すでに二十戸が住む右方の上鹿間の双方に移りました。

ろくおんざん

海善寺（鹿苑山）安政元年六月十四日に起きた大地震で堂の建物が全壊しましたが再建され、同年四十四年、現在地墓地の西隣へそのまま移築し、今年で八十六年目を迎えました。





小山

江戸時代の初期頃までは、**下の山田に対して上の小山**と言われた。

三重古事記によると萩原家の祖、萩原小太郎が坂部村より来て館を建てたと言われる。

正平二四年（1369年）美濃の土岐頼康が、当地方を攻めたが萩原小太郎が戦さに備えたとの記録があり、**戦さが出るだけの人数が当時すでに居た**のであろう。

江戸初期には、50戸程の人口が中頃には、100戸程になっており、これは現在の戸数とほぼ同じである。

不思議な事に当時には、**住職の居る寺がなく、それに無人の寺（説教道場）が2軒もある。**

これは、調べてもどうしても判らなかつた。

宗派としては、**西が浄土真宗（京都西本願寺派）の塩浜の法柳寺**で、**東が浄土真宗（京都東本願寺派）の室山の法蔵寺**が檀寺を努めている。

法蔵寺の住職の話によると、**当檀家は小山、山田、水沢等にあるが昔から皆村の外側に散らばっていた。**

これを推測すると、後から入植した人達が既に手つぎの寺を持っていたが、また、そうでない人達に対する他の宗派の働きかけ等でその地区として、一つにまとめられなかったのでは、ないかと思われる。

江戸時代は菰野藩

なお、矢田監物の頃は、**本郷山田を小山田村と称し、分郷を小山村と称すと加富神社記**にあり。





西山

加富神社記等によると、延宝年間（1673～1681年）西山に出百姓していた山田の伊藤なる者が、小山田村の役人に随心したところ京都の住人平野清左衛門という土木技師が西山に来て、西の方に大池とその東に上池と下池の三箇所を造り、用水路を確保し、水田を開発したとある。

そして、上池、下池の間に弁財天を祀り、さらに、西山の氏神として八所御霊神社建立し、京都へ帰ったとある。

それにより、山田村西山郷として明治の中頃まで山田村の枝郷になっていた。

明治二二年町村制実施により大字山田字平野新田となり、正式な西山村とはならなかった。

正式な西山村となったのは、四日市市へ合併してからである。



特記事

大沢弁財 2 社寛永十五年勸請

法龍寺

安政元年六月十四日夜、大地震起こり西山においても家屋多数倒壊 9 人死亡。

鎌井松石

平野清左衛門





堂ヶ山

室町時代より以前は、**鈴鹿郡六名ノ庄北和田ノ郷道箇山**と**いって六名に属した**。その後、**道箇山**に改められた。(神国秒五鈴遺響と言う古事記による。)

天正十一年(1583)の内宮神領本水帳には、「**たうが山**」と記されている。江戸時代初期には、**三重郡に所属するか、鈴鹿郡に所属するか**で和無田と共に幕府により検分がなされ、**堂ヶ山は三重郡に和無田は鈴鹿郡**となった。

人口も十七世紀後半には**160余名で戸数35戸**であったが、十八世紀になると**人口280、戸数60戸**と増えている。

関ヶ原の合戦で徳川家康が所領しその後、

- ・寛永十三年 本田總守 三河より亀山に転封、**堂ヶ山が亀山藩の所領**となる。
- ・慶安四年 石川主殿下総国佐倉より
- ・寛文十年 板倉隠岐守重常 亀山藩主に
- ・宝永七年 松平和泉守 亀山藩主に
- ・享保二年 板倉近江守 亀山藩主に
- ・延享元年 石川主殿 亀山藩主に
- ・明治二年二月石川氏**版籍奉還**により明治四年七月**亀山県堂箇山村**となり
- ・明治四年十一月二十二日**安濃津県三重郡堂ヶ山村**となった。
- ・明治二十二年四月一日**三重県三重郡小山田村大字堂ヶ山**となった。



堂ヶ山の歴史は、遠生寺の歴史と言っても過言ではない。

亀山駅の東方に陰涼寺山と言う所がある。戦前の三重県立女子師範学校のあった所で、ここに平安朝末期に川見山逝水院 陰涼寺が建てられた。(これが**後に遠生寺**となる)

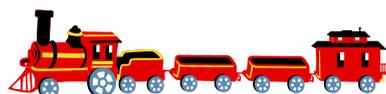
南北朝時代の延元年間に北畠顕家の兵火にかかり焼失。その本尊 阿弥陀如来が**堂ヶ山の別所谷の薬師堂**に移されていたこともあり、また、天台宗でもあったことから、その後当地に移転し、同じ天台宗であった山田の安性寺の末寺となった。天台宗は妻帯を許さない雲水寺で、一代かぎりの住職であった。

寛正の頃、安性寺 高田派に転ずるに、**当寺**も亦**転宗**した。



その後、江戸中期に入る 明暦二年頃、行政や納貢に関し複雑な問題多く、檀徒衆議の上、浄土宗に改宗を沢議し、時の庄屋 内田惣兵衛 亀山藩に上訴するも却下。依って惣兵衛死を決して幕府に直訴せんが為、単身上付す。時に明暦三年二月十五日、かくて三年後に至り改宗許可となり、安濃津阿弥陀寺より 露林和尚きたり浄土宗遠生寺となる。然るに直訴は当時死罪と言われ、罪を負いたる 惣兵衛は2度と帰らず。村民は、その身を悲しみ且つその徳を感じ、良田1町歩を惣兵衛の遺族に永代寄進し、亦上府の日を命日と定めてその苦堤を弔う。かくて時を経ること300年、宗祖法然上人750回忌に惣兵衛の末葉 打田家当主甚三郎 先祖惣兵衛の追善供養を発願し、その位牌を開山和尚の脇座に安置した。

特記事項



・一色山遺跡・・・**縄文時代の四日市で一番古い遺跡**

・堂ヶ山の大樟・・・**四日市の天然記念物**

神明社境内にあり、樹齢800年
(高さ:4.2m、幹周り:1.2m)



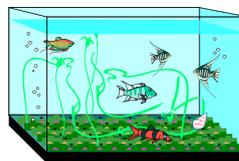
内山

天正年間（天野周防守時代）百姓 2 軒居住するが後、絶え、寛永十九年（1642 年）山田村の農民が分家し、開拓を始め 30 戸に増えた。

山田村の枝郷として菰野藩より治められて来たが、明治二二年町村制施行により山田字内山となった。

当町も安政元年六月十四日の大地震により、大きな被害が出た。

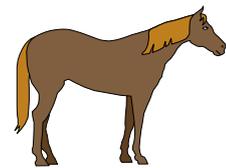
神社は、天正十一年（1583 年）加富神社より分けて内山に祀られた。





美里

青木橋を渡り、左へ曲がると松林の広い大地になる。そのすぐ道の際に、立派な笹野記念碑と、「左どうげ山」と書かれた、長さ 40cm、幅 20cm 角ぐらいの道標が草の中から頭を出している。この細い山道を 3km 程行くと、山田・堂ヶ山を結ぶ県道に出る。その中間に西山・下河内を結ぶ山道がある。西山へ行くには、鎌谷川があり、幅一尺、長さ二尺ほどの道板が橋の役目をしている。しかし、牛馬車は川の浅い所をいきなり渡っていくのである。人は何やら話しながら足早に通り過ぎていく。



いつの頃か分からないが、野武士たち二十人ほどが、この松林の中に住みついた。たぶん、この広い大地を切り開いて農業を計画したのではないかと思うが、何を作ってもうまくいかず、食べるために菰野城下に出かけ夜盗を働いていた。こんなことが度重なり、その夜も酒盛りをしてぐっすり寝こんだ所を、百人近い城の追手に見つかり、どうすることも出来ずに切られてしまった。頭領一人が近くの弁天谷に逃げ込んだが、見つかって討たれ、みんな一緒に埋められてしまったのであった。



それから長い年月が流れて、開畑に挑戦する人が五、六軒、美濃・尾張から来たが、財産をみんなつぎ込んだあげくに失敗、引き揚げてしまった。そんな中に一軒だけが、苦心惨憺してこの地に止まった。これが、現在の河合家である。これほど難儀な開畑をする人は、二度と現れなかった。それほど、美里町の地質は不毛の土地だったのである。



それから二十数年の月日が過ぎ、昭和十七、八年頃、時はまさに太平洋戦争の真っただなか、国を揚げて食料の増産が叫ばれ、この地も、**地元の応援**を得て一息に**開拓された**のである。しかし、**機械もなく、肥料は少なく**、食べるにも事欠く時代である。それに、**疎開者・転職者等みんな素人百姓**である。山林を開墾することは並大抵のことではなく、何軒かは辛抱できずに、この地を後にした。そして、**何とか遂げた人たちが**、現在の**美里町を造り上げた**のである。





六名

昔は、**勢州北和田之郷六名の庄中村**と言った。

当地区は、先住民の**古墳**があるなど狭い土地にしては、早くから人が住みついた。これは、**水が豊富**なためではないかと思われる。

「**六名**」と名付けられたのは**江戸時代**で、その前の室町末期 浄土真宗高田派の祖**眞慧上人**が当地にこられ、**弥陀仏の教え**と「**南無阿弥陀仏**」の**六字名号**を賜り**寺宝**として守って来たこと、また、この辺を治めていた**伊勢の国司**が**内部川沿い**の**鹿間、中村、和無田、堂ヶ山、花川、岸田**を**六邑郷**として扱って来た（**三国地誌**）などが関係しているのではないかと思われる。

天正七年の神領記類にはすでに**六名**の地名が出ている。このように生い立ちが古い地域により**遺跡文化財**も特記すべきものが多い。

しかしなんとと言っても**六名**は**水害との苦難の歴史**であった。近世に入ってからでも**明治二九年八月十日の全水田流出**を初め**大正時代** 1回、**昭和**に2回の**大水害**が村を襲った。

その都度**村民**は、残った田の米を皆で分け合い、力を合わせて必死になって復旧に取り組んだ。このような水害の多い所のため、江戸時代 所属藩が再三変わり、**桑名藩、長島藩**、その後**天領**となり、**江州信楽藩（滋賀）**の代官 **多羅尾氏**が治めた。

藩に納める年貢米は、十二月末までに領主の所まで届けるのが農民に課せられた。**六名**より牛馬の背に乗せ**四日市**まで運び船便で**江戸**へ回送した。

明治四年 **廃藩置県**によって**度会県六名村**となり、その後は**山田**と同じ道を歩んだ。



獅子神楽（六名元須賀神社奉祠）

宝正二年正月発願 流儀箕田流メス

内部川の鉄砲水により度々大きな被害に困った住民が神に救いを求めこの舞いを始めたと言われている。舞いは10段階あり一戸1人は必ず舞いに参加する決まりがあり、春の3月9日は地元の六名と山田町の各家を回り秋祭りの10月10日は神社に舞奉納する。



円満寺

建立された時期は定かでない。一説によれば平安末期ともいわれる。

正式には南面山円満寺という。

5間4面の堂々たる大伽藍であったと伝えられます。

御本尊は秘仏釈迦如来座像で、作者は数々の重要文化財を作った大和地方の名仏師集団・春日氏の作と言われます。平成3年市文化財に指定。



和無田

和無田町の起源は古く「古事記」の時代へさかのぼることができる。

倭建命が三重郡より采女の杖衝坂に至る、いわゆる巡見街道が開けてからのことであり、**当時のこの地を和田**といった。

奈良時代は、御在所に弘法大師が来られて、不動尊像をもって三岳寺を開かれた。

一方、弘法大師は、御在所を下って**和無田に到着**され、この地に一つも寺がない、人々の心が荒れているということで**観音菩薩のご彫刻**をされ、**観音寺を創建**された。人々は喜び、この観音寺を中心に、**六名**(**和無田、岸田、堂ヶ山、中村、乗竹、鹿間**)がまとまるようになった。

この寺を金剛山和合観音寺といい、観音菩薩は今に伝えるところである。

奈良朝から平安朝にかけ、**和無田観音寺の田は天領**となり、御供田となった。

田も上田であり、よい米ができたのである。

和無田の庄屋は中沢家が長くつとめた。

中沢家は、清和源氏の流れを汲み、家は途絶えたが今日で三一代に至り、中沢家に己道をした場所が**的場**である。

和無田の所在は、**はじめは現在の田**にあった。

古市場より内部川に沿って鹿間に至り、鹿間の馬頭観音を拝み、そして和無田に至り、観音寺にお参りして沓掛坂を登り、光善寺に参詣し巡見に至るのが当時の**主要道**であった。



在所は内部川より低かったために、たびたび水害に出会い、ついに江戸時代元禄の頃に、すべて**現在の丘陵地帯に上がった**。

和田という地名は亀山藩に二つあった。

一つは、現在の亀山市の和田である。他の一つは和無田の和田である。

はじめは亀山の和田を南の和田と言い、**和無田の和田を北の和田**と言った。

ところが、どちらの和田かまぎらわしくなり、人々が混同するため、北の和田を**和無田**と変更した。

和田でないという意味であり、これは江戸時代に変更され、今日にいたる。

また、長く亀山藩であった和無田は、江戸末期に三重郡となり、明治には鈴鹿郡となった。

昭和二九年四月に四日市市に加わり今日に至ったのである。

